

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 番匠健一

【所属】 (助成決定時) 同志社大学<奄美・琉球・沖縄>研究センター

【研究題目】 日本帝国における「植民(Colonization)」思想の展開と北海道帝国大学
——南洋パラオ諸島における北海道移民——

【研究の目的】 (400字程度)

日本帝国における近代を、北海道を「結節点」として移動した人たちの経験から考察するのが本研究の目的である。近代北海道を扱った歴史叙述において、明治初期の内地から北海道への移住者は「開拓民」とされ、世紀転換期から戦時期にかけての北海道から満州や樺太、南洋に渡った移住者は「移民」とされた。これは日本帝国の「内地」と「外地」という法域のあいだにひかれた境界線を前提とした区分であるが、移動する人々の経験の側に立った場合にはこの区分が一義的な意味を持つとは限らない。「開拓民」と「移民」を峻別する言語の政治によって不可視化されるのは、「開拓民」は「季節労働者」にもなり、「移民」であり、「植民」でもあるという混沌とした帝国に暮らす人々の実相である。本研究においては、戦後の北海道史において着目されてこなかった南洋帰りの北海道移民の経験を歴史的に考察することからアプローチする。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

①移動民のライフヒストリー研究

これまでの南洋群島をめぐる先行研究においては、パラオ諸島やポナペ諸島など南洋庁の撰定移民が行われた地域において、寒冷地出身者の熱帯適応能力の調査のため北海道・東北出身者の移民が多かったことが指摘されてきた。近年の研究では、南洋庁の植民地区画において北海道移民が農家経営のため土地や農業器具を与えられる「定着化」の対象であったのに対して、沖縄移民を農業労働者や資源採掘の工夫として「浮遊」させる政策がとられたことが明らかにされ、こうした南洋群島帰りの沖縄移民のライフヒストリー研究も積み重ねられている。北海道のなかで南洋に渡った移民が多いとされるのは旭川近辺であるが、引揚げ後の行方は道北・道東など様ではなく、一部の世帯は宮城県蔵王町へ再度入植している。申請者は、パラオに入植した北海道出身者の引揚げ後の行き先を含めて、聞き取り調査および回想録の収集などを行い、「個」の視点からの歴史を照射する作業を行った。

②南方労働力をめぐる「植民学」の思想史研究

日本植民地研究のなかで北海道はとりわけ樺太と満州と深い関係をもつとされてきた。1930年代以降になると、北海道帝国大学の植民学講座においても高岡熊雄を中心とした日本帝国の各植民地を分担研究するチームが結成され、満州・樺太に力点が置かれていた。本研究においては、1930年代より高岡から北海道帝国大学の植民学講座を引き継ぎ、南洋群島の研究チームを担当する上原徹三郎、そして札幌農学校を卒業後、台湾総督府、そして南洋庁興発専務取締役となり製糖業の研究を行った色部米作、そして北海道帝国大学の理論的な中心人物であり、戦後にドイツ南洋統治論を書いた高岡熊雄の3人に焦点を当て、思想的な検討を行った。従来の日本帝国の研究において、南方問題は矢内原忠雄の南洋研究など労働力・政治経済分析に力点を置くのに対して、本研究においては北海道帝国大学の研究者たちによる農業技術・農業経営・植民に力点を置く視点から南方問題を研究した。

【結論・考察】 (400字程度)

本研究の結果、南洋群島における植民地社会の実相に切り込む視角が明らかになった。南洋引揚者の回想録・体

験記は、南洋での生活の苦難であったり、引揚げのプロセスの悲惨な体験が前掲化する傾向にある。また聞き取り調査においても南洋における「植民地経験」を豊かな言葉として語ることは、植民者としての立場から難しい。申請者は、こうした困難を北海道における国内の「植民」経験と植民地経験をつなげ、「植民」することで移動民が見た夢や理想をその功罪と共に考察することから、現代日本の国際理解へと研究成果をつなげたい。

さらには、北海道と南洋という日本帝国の南北両端にある地域を取りあげることから、従来の植民地ごとの地域研究として区分されていた研究領域を横断し、欧米の *Settler Colonialism* の動向などを参照しながら「移動」と植民思想に関わる新たな研究領域を切り開くことへとつなげたい。これは「植民学」があつかった「植民」概念自体が、移動民の越境性を前提にした概念であることから、地域を横断する研究方法が必要とされているためである。高岡熊雄と上原轍三郎についての研究は継続して行い、今後は戦後の北海道総合開発計画や根釧パイロットファームなど道東開発の枠組みと日本帝国の植民学の知の連続性に着眼点をおき研究を進めたい。